

「神道」とは何か～身近にある言葉から考えよう (1)

1 経典に、師に、学ぶ心得とは

「その学の根本は経典にあり、しかれども経を見て経を知る人は少なく、経を学んで経に倣う人もまた少なし、句を知らざるに非ず、聖人の意を知らざるなり。文を学ばざるに非ず、道を学ばんとせず、知の是非に囚われるによってなり」

(聖徳太子)

経典に学ぶことが大切であるが、その意味を正しく理解し、また教えどおりに行う人は少ない。それは経を読んでもそこに書かれた言葉の奥にあるものを得ることがなく、聖人の心まで思い至っていないからである。経典を読みはしてもそれを知識として得たに留まり、物事の是非を論じるばかりで、自らが道を歩むという段階に至らないからだ。

先代旧事本紀大成経にある聖徳太子の言葉ですが、訳するとこのような意味です。文字は読めても心を理解していないということです。そして心がわからない理由として、道を学ぶという意識をもたず、いたずらに知識を求めるだけで止まるからだと続いています。

実はこれ、私がこの道に入ってからずっともう二十年近く言い続けて、聴いている人には耳にタコな話なのですが、気づかれましたか？ 聖徳太子が言っているからというわけではなく、道を学び歩む基本であり、最も大切なことだから重ねて言うことになります。

旧事本紀は難解だという大方の感想ですが、難解でなくなるには、私情に迷わず、あっさりとして平たく、素直に道を求めるということです。そうすれば読めないことはない、誰でも理解することはできますし、人の道、神の道を進んでいくことができます、ということです。

だから旧事本紀を釈義していく上で、わかりやすい現代語へと修正してもいいかという事務局からの質問に、その前提ならば(心から外れなければ)いいと答えています。

原文そのままわかればそれでよし、文言の瑣末なことにとらわれないでもいいということです。釈義をするにあたってすでに詳細の検証を終えた上でのことですし、何よりも肝心なのは、旧事本紀に向かう姿勢が、道を学びたいという心ならばいいのです。人それぞれに学ぶ時間は違いますし、方法もいく通りもありますが道を学ぶという目的は同じです。

本居宣長翁亡きあと、平田篤胤が古事記解釈を大幅に変更したのは学者として新しい事を打ち立て出世したいという個人的な動機からでした。平田篤胤の晩年については個々に調べていただければ、その欲がどういう結果をもたらしたかわかります。

しかし平田亡きあと、その独自の考えである天孫降臨と現人神という概念は、明治政府に

利用され、多くの国民を戦争へ駆り立てる道具として神社が機能したのです。荒唐無稽など笑って済ませられることではありません。それは今に至って尾を引いてもいます。

国家神道などというものが古代からあったわけではなく、明治維新という新時代の為政者たちの要求と、それに乗じた学者の我欲から産まれたものと言えるでしょう。

その前に本居宣長翁が長い歳月を費やして著された「古事記伝」の成果は、活かされることはありませんでした。葬りさられ、知る人ぞ知るといいますか、その後に来たものの力が大きすぎて名のみ残るといふ残念な状況になってしまった。古事記伝は本居宣長翁が30年余の歳月をかけたのです。それをちょっと訪ねてきて著作を読んでわかったつもりになる、学びとるには、それ相応の努力は要るものです。しかし平田篤胤の為した事は我田引水から始まった根柢なき独創です。儒教全盛の当時、誰にも顧みられていなかった「古事記」という古典に着眼し、国の根本的思想を明らかにしたいという本居宣長の志とは異なります。平田は鈴屋門人と自称することで国学者として名を売り、一方で師の心を捨てた所業をした一例、学ぶものとしては許されないことです。

2 血がさわぐ

「旧事本紀は難しく、やすやすと理解できるものではない、凡人には手に負えない書物でもあり、それがかえって人の興味を惹きつけてしまう。高い山ほど登りたくなるというのにも似ているなどと評した人がいましたが、学び始めの者としてはどう考えたらいいでしょうか。」

【源宗】 そう狭く考えなくともいいのです。そういう人も一部にはいるでしょうが、それはほんの一握りの、私に言わせればモグリですから。素直に求めて研究に取り組む人はいます。それは、国書と言われる記紀（古事記、日本書紀）が物足りないからという事なんです。日本人が日本について考える手立てがあまりにもないわけです。その空白を埋めるには旧事本紀ならどうかと思って、求める人は辿りつくのです。しかしながら…難解…どこから始めればいいのか…という壁にぶつかるのではないかと思います。特別な才能があつてわかるといふのではないことは確かです。

昔の人、明治維新から戦前にかけては国体としての天皇制をもとにした歴史観で教育されてきました。だからヤマトタケルノミコトやニニギノミコトなど尊という名も、神武天皇から始まる天皇の名を諳んじていたのですから現代の人よりも天皇は身近にあったと思います。正しい理解かどうかは別としてです。

国の中心を意識でき、そこに連なる民として良くも悪くも上も見、足元をも見る事ができたわけです。良くも悪くもというのは、いつの世もそうですが、体制があれば反体制もあり、上と下、どちらかに心を寄せれば、片方を厭う気持ちが出てくるということです。

戦後の日本人は心のよりどころをどこに求めるかということに悩み続けてきたといえます。戦前にそれがあったというわけではなく、国家体制の変革がもたらした精神的な喪失感があまりに大きかった、そこへ付け焼き刃的な経済成長に走り続けた結果、そのツケとも言えます。戦後の日本は自らの精神文化を置き忘れ、あるいは捨ててしまっただけでゆえにがむしゃらに走ることができた、そして空腹が満たされたあとには空虚が露わになってきた、それが現代の日本の姿とも言えます。現在はそこからさらに奈落へと滑り落ちていくような状況ではないでしょうか。

団塊の世代が定年を迎え、ほとんどの日本人が戦後の価値観の中にいますから、彼らには中心がない、つまりよりどころは己自身の中にしかないのです。それを外に、歴史に求めようとして記紀や古伝書などに目が向くようになる。それをもとに考えても今ひとつすっきりしない、むしろ矛盾が出てくるばかりなのです。

仏教に目を向けたり西洋哲学に求めたり、瞑想法にはまったり、自己洞察をする方法ならば色々あります。しかし根元がわからない。人は歳をとればとるほど結局のところ、日本人は日本人としての血が騒ぐということになるのです。

これは若いときには「なんだそんなもの」と思うかもしれない。若くても深く物事を考える感受性が鋭い人は早くから日本的なものの魅力に気づくことがあると思いますが、一般的にはそれは少数です。現代は日本的なものは目には見えにくくなっています。だから経験を積み、年齢を重ねた上で、あるいは国外で長く暮らしていた人が「日本」を知りたくなるという場合が多いのです。

海外で異文化の中で生活していると、日本人としての自分を考えざるをえない場面が必ずあります。どこかで日本人の血が騒ぐという体験をするのです。わかりやすいように血が騒ぐなんて言いましたが、血は血であるから無条件で内側から湧いてくるものがあるという感覚ですね、なにかわからないけれども反応する胸騒ぎです。

日本は自然に恵まれていることも影響しています。自然は地神のハタラキで、自然そのものが神ということではありません。しかし、日本という国の絶対的な価値は四季があるということなのです。日本文化の根底にあるものは自然に依らず心です。近年は異常気象で季節感に変化してきていますが、稲作は四季の恵みがあってこそその伝統です。建築物、生活様式、古来の伝統文化、すべてが自然の特徴に根ざしています。その中心に稲作があり、神を奉ることもまた稲作と密接にありました。

異常気象で暖冬になり、桜前線が今年例年と違うなとなったにしても、人の心のなかに桜は根づいています。開花日がずれ込んでも花見を楽しみにし、順々に咲く花を待ち、喜びます。ハウス栽培で年中野菜を作るようになって、季節ごとに実る旬の物を初物と愛でて大切にしましょう。

このように四季の恵みは日本人の心のよりどころとなっているのですが、ではなぜそれがそうなったかという根本の意味が先代旧事本紀大成経（以下旧事本紀）に説かれているわけです。春夏秋冬で表現された心が説かれています。

記紀(古事記、日本書紀)が時の権力者に偏った編纂がなされていることは、すでによく知られていることです。歴史は政治権力の変遷の記録ですが、為政者とはどうあるべきか、王の心、臣下の心、庶民の心、それぞれの在るべき姿が、一個人としてのあるべきようを基にして説かれているのが旧事本紀です。身分によって変わることがない常の部分、それが記紀にはありません。記紀に記されている権力の変遷や人物にまつわる逸話、栄枯盛衰から読み取れるのは、文体は古伝でもその内容は、いま目の前にある彷徨える日本とあまり変わりません。そこには日本の「心」は失われています。記紀からは得られないのが、栄枯盛衰の裏側にあるはずの古代の人々の智慧ともいえます。

人が本当に知りたいのは心です。知らず知らずのうちに求めている「日本の心」「日本の魂」が、神代から伝わる教えとして詳細に書かれているならば、国書として記紀は今も古びることなく日本人の座右に置かれるでしょう。しかし、残念といたしますか、それはありません。より古い時代に編纂された先代旧事本紀大成経にまで辿りつくならば、生きるとは何か、神とは何かの答えがそこにあります。日本人の、日本のという境界のない、普遍的な人の道が書かれていますから、迷える人にはありがたい導きになると思います。

しかし、旧事本紀がそういう書物だと知らない人がほとんどです。一見してそうは見えないですからね(笑)

【安齋】 知らず知らずに求めるというのが不思議ですね。

【源宗】 四季はめぐり、新しい芽生えのためには冬枯れの季節があるでしょう。めぐって変わり、まためぐる。けれども変わらないものがあるから人は春を待っているのです。そのかわらないものが「心」で、それを無意識でとらえている、知っているのです。

言葉で認識していなくてもわかっていることはあるものです。しかし、言葉としてとらえたいから求める、意識して探す、確かめて安心するということですね。死の境を超えて残るのはやはり「心」なのです。物質的にいくら栄えても人が究極で求めるのは、精神が満たされることです。

【安齋】 どうして満たされないのでしょうか。

【源宗】 さあ、どうしてでしょうね。今、あなたがどうしてだろうと思う、その思う心はどこからきましたか？ ふ～ん、そうかと聞き流すことができない人が最近減ってしまい、たいていは考えないまま流してしまいます。「そういうもんなんだ」で終わってしまう。同調を求める空気を互いに感じとって深く突き詰めることが悪いことであるような風潮もあります。

けれども、人が人であるゆえんは、「何故」と考えるからなのです。何故を考え、つきつめていく、そして一番よい形に落ち着く、それを導くのが魂です。人が物質で満足しないの

は魂があるからです。だから、物を作り、その物に魂を込める、自然に触れ、自然と魂でひびきあうことで喜び、また悲しむ。古来、日本人はそういう暮らし方をし、それが文化となり伝えられてきました。

深くつきつめたところの物事の理、いかにしてそれが成立したか、ということを見ていくと、何につけ、独特な「日本的なもの」という形と姿が見えてきます。そして、実はそれが「日本的」という枠を超え、人の世にとって有益な普遍的なことだと気づくのです。人間にとって真に良いことは、他の生きものや自然全体にとっても良いことという、そういう普遍性です。旧事本紀の最も大切な本質はそこにあり、日本人だけにしか通じない思想ではないということです。

(続)